

## 能の仕組みと魅力を知る

法政大学能楽研究所所長  
教授 山中 玲子

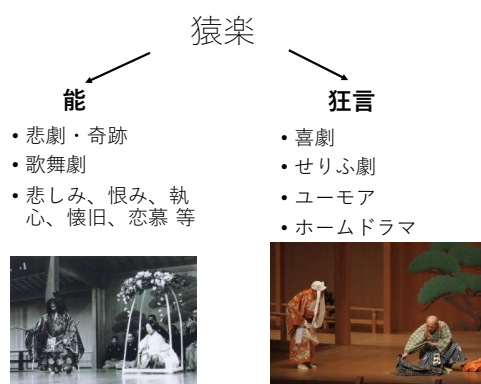
今日はアカデミックな話を期待される方もおられるかと思いますが、能はエンターテインメントですので気楽にお聞きいただけたらよろしいかと思えます。能は、全部理解しなくてはもったいない、というようなものではなく、お殿様の芸能ですから、ぼんやりと好きなところだけつまみ食いするような楽しみかたをゆっくり重ねていくものだと思っています。まずは気楽に私の話をお聞きいただき詳しくは後ほどお配りしてあるレジュメをご覧ください。「能ってどう見ればよいのですか？」という質問への答えは「どうぞお好きに」なのですが、おしゃれ上手な人にその秘訣を聞くと「好きなように着ればいいのよ」と返答されるのと同じで、そういう答えでは不親切なので、最低限これだけ知っていれば、安心かな、という程度の基本情報、能を構成している要素や仕組みをお伝えします。これが前半のテーマです。そして、後半では、他のすべての演劇とか芸能と能を区別している、最も能らしい夢幻能についてご紹介していきます。

### 能とは何か

- 室町時代（14世紀半ば）
- 観阿弥・世阿弥父子によって大成
- 日本でいちばん古い演劇
- 面と美しい装束を用いる歌舞劇
- 脚本・音楽・演技に独自の様式
- 屋根付きの専用舞台

それでは本題に入ります。先ず基本情報ですが、レジュメにも書いてありますように能は室町時代に成立した日本で最古の歌舞劇です。皆さん、ギリシャ劇の方がずっと古いじゃないかと思われかもしれませんが、でもギリシャ劇の方は、テキストだけが残されていて、当時の演じ方は伝わっていません。現代の役者が残されたテキストを解釈して演じています。それに対して能は、600年以上、一度も途切れることなく専門のプロフェッショナル集団により演じられ続けてきました。ずっと演じ続けられてきた演劇としては世界で最古のものの一つと言えます。そして今日でも世界の演劇の中の一つとして、演じら

れています。面や美しい装束を用いる歌舞劇として独自の様式を備え、専用の屋根付き能舞台で演じられることを前提として進化してきました。



### 能と歌舞伎の違い

能	歌舞伎
14 世紀	・ 16-17 世紀
ミニマリズム	・ 誇張
(省略・象徴)	・ リアリズム
化粧はしない / 仮面劇	・ 化粧
男性役者 — 女性の役	・ 男性役者 — 男の役
女性役者 — 男性役	・ 女性の役 (女形)

能は明治になるまでは猿楽と呼ばれ、猿楽には能と狂言の二つがありました。能は歌舞劇で悲劇や奇跡を演じ、狂言は科白(せりふ)劇で喜劇が中心でほのぼのとしたホームドラマ的なものと言えます。

同じように我が国の古典芸能として存在する歌舞伎は、江戸時代初期に始まりました。能より 200 年遅い誕生です。動作に省略が多いミニマリズムの能に対し、歌舞伎ではリアリズムを旨とし誇張し

た動きが基本になります。隈取りや化粧を施す歌舞伎に対し、能は仮面劇で化粧はしません。

また、皆さんの中にも誤解されている方も多いと思いますが、現在の能楽界にはプロの女性能楽師も大勢いらっしゃいます。他方、歌舞伎の役者に女性は存在しません。男性が女性役をこなす女形(おやま)によってその役割を果たしています。歌舞伎の家の娘は役者になるのではなく日本舞踊の名取りになるとか家元になるなど、別の道を選びます。歌舞伎にも外の世界から入ってくる人たちがいますが、主役はできません。能の世界では能楽師の家に生まれなくても、場合によっては大学を卒業してから弟子入りをして役者になる人も多くいますし、実力さえあれば活躍する道が開けています。

## 上演曲

現在の上演曲目は約240曲

よく演じられるのは120曲ほど

15世紀までに作られた作品を繰り返し上演

作者不明の名曲も多い

新作も多少ある

能の上演曲は、現在およそ240曲位あり、その中でよく演じられているのは120曲程度です。戦国時代の終わり頃までに作られた曲を繰り返し繰り返し、上演して洗練させてきました。作者不明の名曲もたくさんあります。

その120曲なり240曲なりに、どんなキャラクターが登場して、何を描いているのか。たとえば『源氏物語』・『伊勢物語』などの古典文学に登場する優美な貴族の男女の霊、源平の合戦で死んだ平家の公達の霊、地獄に堕ちて苦しんでいる男女の霊、というように、幽霊が多く出てきます。また、草花の精、神、鬼、天狗など、人間以外のものも多く登場します。これらが、今日の後半でお話しする「夢幻能」の主役になります。夢幻能のことはあとでお話しします。

もちろん、現実には生きている人間が主人公の能もたくさんあり、夢幻能に対して、現在能と呼ばれています。5)に上げたように、別れ別れになった親子や夫婦、芸能者、武士等が、ドラマを繰り広げます。現実の時間の中で事件が起こり葛藤を経てやがて解決していく様子が描かれるのです。

何が出てくるか

- 1) 源氏物語・伊勢物語等古典文学に登場する貴族の男女の霊
- 2) 源平の戦で死んだ武将の霊
- 3) 地獄に堕ちた男女の霊
- 4) 神・鬼・天狗・精など人間以外のもの
- 5) 別れ別れになった親子や夫婦、芸能者、武士など、現実の人間

夢幻能

→ 現在能

- ・ 現実の人間同士のドラマ
- ・ 何事かが起こり葛藤を経て解決
- ・ 鬼退治の話などもあり

## 主なパート

シテ：主役 「シテ中心主義」

ワキ：シテと応対しシテの演技を引出す役。僧・神官・勅使など。面を着けない

ツレ・ワキツレ：シテやワキの従者。シテ的な演技、ワキ的な演技をする他の登場人物

地謡：コーラス。出来事や情景、人物の心情などを謡う

囃子：笛・小鼓・大鼓。曲によっては太鼓も

アイ：狂言の役者も能の中で一役を担う

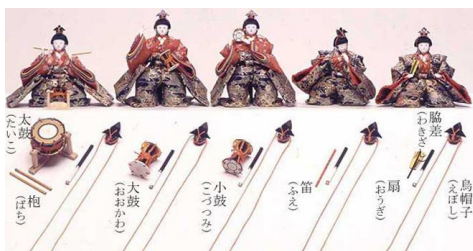
ではこういう役を演じるのはどういう人たちでしょうか。舞台にはどんな人たちが出ているのか、という話です。

主役のことをシテと言います。能は主役であるシテ中心主義で、上に述べたような様々な役も、みなシテのものです。シテの演技を引き出す役割を演じるワキは、特に夢幻能の場合はどこかに出かけ誰かに会い観客のためにいろいろな情報を聞き出すレポーターの様な感じですが。他に、シテやワキに連れだつて出る、ツレ・ワキツレもいます。

地謡(じうたい)も能には必ず出てきます。地謡座に6人から8人が座りコーラスの役割をしています。

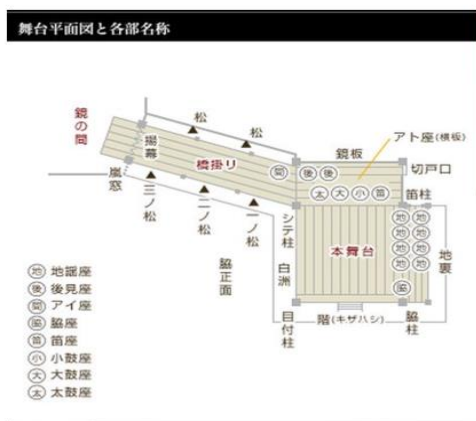
それから、狂言の役者も、能の中で一役をにない、アイと呼ばれています。

舞台上には楽器の演奏を担当する囃子方も出ています。その内容は笛、小鼓、大鼓、さらに場合によって太鼓が加わります。ひな人形の五人囃子というのは、実は、能のお囃子四人と謡を謡うシテ方の役



者一人で構成されています。ですから能舞台での囃子方の並び方が、五人囃子の正しい並べかたです。

笛、小鼓、大鼓、太鼓はそれぞれ専門職として役をこなし、役を替わることはありません。これはシテがワキを代行することは無く、その逆も無いのと同じです。



能舞台の写真をいくつかお見せします（上左の写真は新宿区の矢来能楽堂）。客席から見てたいへん邪魔になるところに柱があります。でも、この柱は面を着けて演じている能楽師にとってなくてはならない重要な柱です。能面を着けた状態では演者の視界が非常に限られるため、この柱がないと足を踏み外して舞台から落ちてしまいます。目印となる柱、という意味で、目付柱（めつけばしら）と呼ばれています。平面図（上右図）の方を見るとよくわかりますが、能舞台は、長方形ではなくて真四角の本舞台の後方に橋懸りという廊下が斜めに付いている、というのが特徴です。実際にどのように使われているか、詳しくはこのあと流します動画をご覧ください。

（桜映画社『能』より、能《藤戸》の部分を上映）

今見ていただいたフィルムには、中年の女性の面と、地獄に落ちた男の面が出てきました。世間ではよく無表情な人を「能面のような」と言いますが、それは大きな誤解です。能面の表情は「無表情」ではなくて「中間表情」といいます。シテの動きにつれて微妙に変化するように作られていて、上手な役者が演じると本当に表情が変化して見えるものです。でも、そのような微妙な表情は、面を着けた顔や身体がぐらぐら揺れていては、絶対に表現できません。重い能装束を着けて微妙な造形の能面を活かすためには、腰の重心を安定させることが肝要で能楽師は厳しい身体訓練を積んで、常に腰の重心が一定でいられるような構え（姿勢）とハコビ（歩行）を身につけているのです。

能がもし「現在能」だけだったら、他の演劇と同じわけですから、中間表情の能面も、それを活かすための姿勢や歩行も、発達しなかったかもしれません。能のさまざまな技法は「夢幻能」を活かすために発達してきたのだろうと、私は考えています。では、夢幻能とはどんなものか。夢幻能は、今そこに起こっている出来事を目で見るのではなく、ずっと昔に死んだ人があの世から戻ってきて出来事を回想しワキに向かって「語る」のを聞く、という構造になっています。ごく一般的な夢幻能の構成をスライドに載せました。

## 夢幻能

- 1 僧や動使などの旅行者（ワキ）がある土地へ行くと、そこに住む里人（前シテ）が現れ、二人は言葉を交わす。
- 2 里人は、その場所に関わる物語を詳しく語った後、実は自分がその物語の中心人物であることをほのめかして、姿を消す。
- 3 ワキが待つうちに、先ほどの人物（後シテ）が、今度は本当の姿で現れる。そして、舞を舞ったり昔の様子を再現して見せたりする。

記憶 回想 反芻



ポイントは「記憶」を「回想」し「反芻」ということです。記憶の回想というスタイルを取ること、現実的な時間や空間の制約がなくなり、その主人公の思い出したいことだけが、思い出されるという仕組みです。悲しみでも恋慕の思いでも、ノスタルジーや恨みでも、目に見えず手にも取れない感情や情趣を、事の顛末、紆余曲折から離れて伝えることができる作劇法なのです。

## 加藤久仁生「つみきのいえ」



夢幻能との関連で、ご紹介したいアニメがあります。加藤久仁生という人が作った「つみきのいえ」。15分位の短いアニメーション映画ですが米国アカデミー賞をはじめ世界中の映画祭で評価された作品です。(左写真)

水没しかけている塔のような家で、ハッチを開けては下の階へと降りていく。そのたびに、その部屋で繰り広げた生活の場面を思い出す、というのを繰り返して幼なじみの女性と結婚したところまで回想していくのですが、過去を回想して人生を振り返る手法は能の代表作「井筒」で演じられるものと同じです。650年

も前に世阿弥は、同じ発想で《井筒》という能を作ったのです。



《井筒》の素材は『伊勢物語』の23段。昔、隣同士に住んでいた幼なじみが背比べをしたり井戸の中を覗いたりして遊んでいました。やがて思春期になると恥ずかしがって会うこともなくなってきました。それでも二人がお互いを想う気持ちは変わらず、親が勧める相手とは結婚しません。そのうちに男の方から恋文が送られます。「筒井づの井筒に掛けしまろがたけ 生ひにけらしな妹見ざるまに」と歌を送ったのに対し、彼女の方からは「比べこし振り分け髪も肩過ぎぬ 君ならずして誰か上ぐべき」と返歌があり、相思相愛の2人はやがてめでたく結婚し幸せな生活を

始めますが、それも長くは続きません。男は高安の里に愛人ができ、そこへも通うようになります。しかし女は彼を恨むどころか、夜半にもきれいに化粧をし「風吹けば沖つ白波たつたやま 夜半にや君が一人ゆくらむ」と、不安な夜道に行く夫の身を案じる歌を詠んだので、その心が夫に通じ、高安の女との関係はなくなります。夫は在原業平。女はたくさんいた妻の一人、紀有常娘です。

この話を順番に大河ドラマのように演ずるのではなく、あの世から女の霊が現れて、まず夫婦の危機とそれを乗り越えたことを思い出し、そこからの連想でプロポーズを待っていたときのことを思い出し、さらに後半になると、懐かしい夫の形見の衣装を身につけ、幼い頃に二人で遊んだ井戸に近寄り、昔と同じように井戸に姿を映します。そこに見えるのは業平の衣装を着た自分ですが、もう自分なのか恋する相手なのか、境界が曖昧になって「見ればなつかしや」とつぶやきます。彼女がそこに見ているのは、恋しい夫の姿でもあるし、何層にも積み重なった二人の思い出なのだと思います。

もちろん、夢幻能で描かれるのは愛の記憶とは限りません。どうしても消えない屈辱、恨み、悔やんでも悔やみきれない思い出も。あるいは、あの世から振り返って俯瞰したときにここが光っている、という人生の輝ける思い出でも。その出来事やそのときの思いを、夢幻能のシテは誰かに聞いてほしくて、語りたくて、何度でも戻ってくるんです。ワキのお坊さんはそういう霊の話をじっくり聞いてあげる。私たち観客も、ワキを通して、彼らの話に耳を傾ける、という仕組みです。もう一つ、この記憶が、ずっと同じ場所に積み重ねられたものだという事も確認しておきたいと思います。今は草が茫々と生

えて井戸のそばには薄(すすき)も生えている古寺でも、今日の前に見えているものの向こうには「かつてここでこういうことがあった」という記憶が積もっているわけです。みなさんにもそういう大切な場所がきっとあるだろうと思います。

こう考えてみると、夢幻能というのは、我々のように歳を重ねた人間の方が、楽しめるのではないかと思います。もちろん言葉は古語ですし聞き取りにくいことは確かですが、全てを聞き取る必要なんてまったくないので、まずは気楽に、能をご覧になっていただければうれしいな、と思います。

以上で私のお話は終わりとさせていただきます。 ご清聴ありがとうございました。

### 【質疑応答】

**Q**：足利義満が能楽を保護し、世阿弥と男色の関係にあったというのは本当か？ 義満がもう少しで天皇になれそうだったというのは真実か？ また、世阿弥が義満を殺害したという事実は考えられるか？

**A**：男色の方は多分当時はそうであったのだろうと思います。当時としてはごく普通のこと、お寺のお稚児さんになることで、学問を身につけるといことはよくありました。義満が天皇の地位を狙っていたという説は以前ありましたが、現在では中世史の先生方も否定しているのではないかと思います。世阿弥による義満殺害も、事実ではないと思います。少なくとも能楽の世界ではそのようには捉えていません。

**Q**：『伊勢物語』23段には李白の漢詩「長干行」があるという説がありますが、先生はどう思われますか？ また自分の親たちが、幼なじみ同士の男女のことを「筒井筒の仲だから」と言っていたのを思い出した。

**A**：『伊勢物語』23段と李白の漢詩については専門の研究者がどのように考えているのか類似の論文等出ているか帰ってから調べてみます（→そのような論文がありました）。私も関係がありそうだなと思いました。「筒井筒の仲」という表現がごく普通に一世代前までは使われていたということには感銘を受けました。謡曲各曲の有名な場面は江戸時代の工芸品などにも多く取り入れられ、この《井筒》の水鏡の場面などもよく蒔絵になつたりしています。そういう文化の流れの中で、つい数十年前まで幼なじみの男女（が結婚すること）を「筒井筒の仲」と言っていたのですね。

## 山中 玲子（やまなか れいこ）先生のプロフィール

### 【経歴】

1957年（昭和32年）東京生  
1980年 東京大学文学部国文科卒業  
1986年 東京大学大学院博士課程修了  
1991年 東京大学留学生センター専任講師  
1993年 東京大学留学生センター助教授  
1998年 野上記念法政大学能楽研究所助教授  
2001年 同研究所教授（現職）  
2011年 同研究所所長（現職）

### 【主な著書】

『能の演出 その形成と変容』 1998年 若草書房  
『岩波講座 能・狂言別巻能楽図説』（共著） 1992年 岩波書店  
『世阿弥のことば一〇〇選』（監修） 2013年 檜書店  
『人生をひもとく日本の古典』（共著） 2013年 岩波書店  
『能楽の現在と未来』（編集） 2015年 法政大学能楽研究所 など